

三、有機農業運動の地域的展開

——高島町有機農業研究会の事例——

秋田県立農業短期大学農村生活学科 青木辰司
筑波大学体育科学系 松村和則

一 はじめに

「科学者は大衆―基本的社会集団―と協働する責任、そして我々自身の社会科学の伝統からだけでなく、大衆の知恵からも学ぶ責任をもたねばならない。」(O・F・ポルダ編/鈴木広監訳『社会変革の挑戦』ミネルヴァ書房、八頁) こうして、ポルダの言葉を冒頭に挙げらるまでもなく、「村研」の伝統は、常にこの「姿勢」を共有する事から出発したと思う。

マクロな運動論とミクロなその離反に悩む「研究者」以上に、確たる「敵」を想定できない現代社会の「危機」的状况に苛立ち、苦しむのは農民である。かつて「反科学」的な志向(島崎稔『研究通信』九九号)と評された有機農業運動であるが、「農民の主體的な組織化」として位置付け、十五年の歴史をもつ高島町有機農業研究会から何を学び得るかをまず考えたい。

また、「生活環境主義」(鳥越皓之等)に立った「創造性の契機」を探りだそうとする地道な「実証」研究、「実践」のための理論研究も始まった。こうした農村社会学における新たな試みにも学び、消費者運動論に偏った有機農業運動研究を補充していく中で、イエ・ムラ研究との接点をも模索したい。

ところで、「有機農業運動」(以下「運動」)は「都市と農村の対立」を前提にした社会学のこれまでの運動論とは事なり、その基本的理念に於いて「都市と農村の共生」を謳っている。しかし一方で、「運動」は特定階層の消費者による自己防衛的性格、生産者による自給運動的性格を併せ持つ。従来、「運動」への批判の多くはこの点に集中している。いうならば、「運動」の「実践」が如何に地域的に展開するかにかかっている。

二 「運動」の成立と展開の概略

まず、「運動」の歴史を考える時、昭和二十年代の旧村レベルの文化運動・各種学習活動、昭和三十年代連合青年団結成以降極めて活発に展開されて来た農村青年活動について述べなくてはならないだろう。「六十年安保」を境として連合青年団活動は下火となり、地区青年団内に作られた「農研サークル」(農業後継者の研修・親睦を自指し、高島では「雄飛会」の活動が目覚ましい。)が学習・研修活動を引継いだ。彼等は昭和四十四年から行政をも巻き込んで、「高島町青年自治研修会」を開催し、青年団の出稼ぎ阻止の運動を高揚させた。こうした様々なレベルでの青年の運動が、星寛治氏の指導の下、氏の説く「自給思想」に後援されて、「有畜小農複合経営」の理念へと辿りついた。しかし、昭和四十八年結成の「有機研」に結集した若者たちは、有機農業の理念からは、大きくはなれた実践をしていた者たちばかりであった。相対的に経営規模が大きい故に「自立農家」への道を歩まざるを得ない農家後継者がその中心であった。また、この出発は、個別農家内二世代の合意、協業体制を不可欠としていた。さて、高島町の「有機農業運動」は、昭和四十八年の「有機研」の

設立に端を発する。設立以来一五年を経過した「有機研」の「運動」は、「成立期」、「充実期」を経て「転換期」に入った。昭和五八年以降のこの時期は、「ブロック制」（以下「B制」）の導入、農業の空中散布（以下「空散」）の問題に象徴されるように「運動」の地域的課題が顕在化する。

「B制」とは、会員の居住地域にほぼ即して、単独あるいは複数で編成されたブロック単位に、消費者団体と提携し、有機農産物を販売するシステムをいい、各々のブロックが作村・販売活動の主体となった。

「B制」は、「運動」展開の過程で、「運動」の認識・対応姿勢に会員間の相違が顕在化した結果の組織的対応であり、「運動」の地域的多極化を伴っている。

「転換期」における「有機研」のもう一つの重大課題は、「空散」問題に象徴される利害対立の顕在化である。農業労働力の高齢化・兼業化を背景として、圧倒的多数が「空散」の効能を信じる生産現場の実状の中で、性急な「空散」廃止要求は、「会員」の地域的孤立を招きかねない。一方、消費者側からは、提携廃止を辞さない強硬な要求が提示され、「有機研」は、その対応に苦慮しながら、行政諸機関へ緩やかな要求を行っている。

こうして「空散」問題は、「運動」展開の場における「有機研」会員対一般農家・役場・農協、及び「運動」展開の場にする消費者対生産者、という二つの次元の利害対立を招く結果となった。

「有機研」が当初から活動方針としてきた「地域に根を張る運動」という課題は、「B制」および「空散」問題というエポックによって初めて対峙化され、今まさに、その具体的対応が迫られてきている。

（詳細は、星寛治『鎌の詩―むらの文化論―』（ダイヤモンド社、松村・青木「農村地域における有機農業運動研究（その一）（その二）」筑波大学体育科学系紀要」第十一巻、『秋田県立農業短期大学研究報告』第十四号、中島紀一他「地域農業の展開と青年の活動（I）」『総合農学』二四号参照）

三 「運動」の多極化とその背景

「有機研」の「運動」は、「B制」導入及び「空散」問題という地域的課題の前に、組織的展開力を顕現できぬまま停滞化しつつあるが、その基本的な原因は、「運動」の多極化にあるといえる。

各部ロック間には、「運動」実現に関する方法論上の差異が顕在化し、その懸隔は、個別農家の実践活動を重視した「前衛運動」を指す「糠亀ブロック」と、地域ぐるみの組織的活動を重視して「大衆運動」を目指す「和田ブロック」との間に特に顕著である。前者は、消費者グループ・団体との提携関係の進化を、後者は、低農業米生産組合をはじめとして「有機研」周縁部の組織化をと、各々「運動」展開の重点を異にしている。

こうした「糠亀ブロック」と「和田ブロック」との対照的な「運動」の地域的展開の背景には、「地域」の持つ歴史性・社会構造の特色に還元された「暮しの場」の連続性がある。

紙幅の関係上、その詳細は大会で披露することにするが、「運動」の多極的展開の示唆するところは次の点にある。農村地域における「運動」が、多様な会員と多様なイデオロギー構成を包含しつつ、組織的合意を果たそうとするとき、今日の重層化した「地域」の歴史性・社会的要因を踏まえた柔軟な調整が「運動」継続の要である。

事実、今日「有機研」は、日本有機農業研究会の全国大会を主催した当時の組織力も行動力も失い、多くの会員は個別農家経営の枠内に回帰しつつある。

大会報告では、「糠亀ブロック」と「和田ブロック」両者の「運動」の展開とその背景を対照しながら、主に「運動」展開の地域的基盤の差異について考察を加えてみたい。さらに、こうした組織としての力を縮小しつつある状況の中で、個々の会員の部落における地道な「運動」の「実践」についても報告する。その際、研究者が概念化して来た「イエ・ムラ」との関わりにもふれてみたい。